

時代別の帖佐人形

帖佐人形は窯元が多かったため、製作者を特定することは困難ですが、製作年代が判明したものは下段に記しました。



鯉抱き金太郎 大正3年(1914)

山姥(やまんば)

兜もち



武者(むしゃ) 明治時代

武内宿禰(たけのうちのすくね) 大正3年(1914)

武内宿禰 昭和10年代



神功皇后(じんぐうこうごう) 大正3年

鳥かごもち 大正3年

おぼこ

戦後復活した人形たち

帖佐人形保存会 昭和40年(1965)発足。

故折田太刀男氏の作品



熊乗り金太郎

佐々木四郎高綱

陸軍大将

折田貴子氏の作品(昭和62年撮影)



神功皇后

座り犬

犬乗り童子

袋もち

鯛抱きエビス

帖佐人形の展示施設

始良市歴史民俗資料館

〒899-5421 鹿児島県始良市東餅田498番地
TEL0995-65-1553 FAX0995-66-5820

- ◆開館時間 9:00~17:00(入館は16:30まで)
- ◆休館日 月曜日(祝日・振替休日の場合はその翌日) 毎月25日(日曜除く) 年末年始(12/29~1/3)

| 区分 | 個人 | 団体 |
|-----------|------|------|
| 一般・大学生 | 210円 | 160円 |
| 小学・中学・高校生 | 100円 | 50円 |

*団体は15名以上

編集・発行 始良市歴史民俗資料館
発行年月日 平成18年3月31日

帖佐人形の概要

素朴で郷土色豊かな帖佐人形は、鹿児島県を代表する土人形です。その起源ははっきりしませんが、嘉永6年(1853)の刻銘をもつ土型(右写真)が残っていますので、遅くとも江戸時代の後半には人形製作が始まっていたと推測されます。一般に土人形の起源は、京都の伏見人形といわれており、その始まりは江戸時代中頃であり、型入れの製作技法はまたたく間に全国に普及したといわれています。



嘉永6年の刻銘土型

帖佐人形は高樋集落を中心に作られていたことから高樋人形とも呼ばれています。最盛期の大正年間には、約40窯を数え、全国にその名が知られていました。

昭和の初めごろに途絶えてしまいましたが、昭和40年(1965)折田太刀男・湯田晃氏ら有志によって帖佐人形保存会が結成され、帖佐人形が復活しました。



図1 大正から昭和初期にかけての帖佐人形窯分布図(始良町西餅田高樋集落とその周辺)

土人形の歴史

江戸時代の土人形

江戸時代の農学者大蔵永常が著した「広益国産考」には、三河人形の製作方法が詳しく絵入りで述べられています。明治時代には、全国の土人形産地は145ヶ所あり、九州には21ヶ所ありました。



図2 型入れ



図3 窯出し



図4 絵付け

帖佐人形の種類

現在、帖佐人形として確認されているものは、大きさの大小を区別しないで、79種類を数えます。

男人形(25種)

雛人形(対)・羽織着相撲取・取り組み相撲(大小)・鎧武者(大中小)・佐々木四郎高綱・源義経・曾我五郎・加藤清正・男舞・清水次郎長・犬乗り童子(2種)・犬抱き童子・牛乗り・小僧・綿帽子・石童丸・名僧・宝袋もち・太鼓乗り・鯛もち・鯛抱き・琵琶法師(大小)・大石内蔵助・大石主税・饅頭割り

女人形(22種)

八重垣姫(兜さざげ)・雛人形(対)・兜もち・兜さざげ(大小)・鳥かごもち・三味線もち・子抱き女・茶摘み女・子守女・犬抱き女・七五三子守女傘もち・七五三子守女鞠もち・鼓もち・花嫁・静御前・官女・元禄女・経読み女・三味線女・ゴッタン弾き・男女抱合人形・御高祖頭巾

動物(7種)

鶏(対)・猫手まり遊び・猫・招き子犬・狛犬(立犬)・狛犬(座犬)・狛犬(他6種)

時代風俗(6種)

騎兵・海軍・陸軍大将・大礼服・女学生・自転車乗り

神話伝説(4種)

武内宿禰(大・小)・神功皇后(大・小)・山姥・竜王

縁起物(15種)

福助・三番叟・熊抱き金太郎(大・小)・熊乗り金太郎・鯉抱き金太郎・鯛抱き恵比寿・鯛乗り恵比寿(大・小)・亀抱き童子・大黒様(大・小)・俵乗り大黒・俵乗り若大黒・若大黒(大・小)・福猿・天神(大・中・小)・大尽

帖佐人形では、神功皇后や武内宿禰、金太郎など神話や昔話からの人形が多く作られました。

郷土の素朴な伝統工芸品

帖佐人形



犬抱き女



武内宿禰



武者

製作工程

原料の粘土は、高樋集落の周辺にある水田下にある粘土を採取して使用しています。



1 粘土調整
ウスで粘土をつく。



2 粘土をこねる
不純物や空気を抜く。



3 弓で粘土を切る
弓には糸を張る。



4 粘土板を用意する
粘土の厚さは約1センチ。



5 型入れ前の準備
雲母をかけ、取れやすくする。



6 型入れ
粘土板にも雲母を付ける。



12 粘土除去
余分な粘土をけずり取る。



11 型合わせ
強く両側から押す。



10 型入れ終了
縁際の山形同士を合わせる。



9 型入れ
粘土のあまりを取り除く。



8 型入れ
縁側は山形に整える。



7 型入れ
指で粘土を強く押す。



13 土台補強
粘土ヒモでつなぎ目を補強。



14 型はずし
約1時間後に型をはずす。



15 型出し
型はゆっくりとはずす。



16 バリ除去
余分な粘土のバリを取る。



17 乾燥させた人形
約2ヶ月自然乾燥させる。



18 窯入れ
大きなものから詰めていく。



24 絵付け
最後に目を書き入れる。



23 絵付け
オモテ側のみに彩色する。



22 下地塗り
ニカワ入りの胡粉を塗る。



21 窯出し
取り出して汚れを落とす。



20 窯焼き
竹を燃料に弱火で5・6時間焼く。



19 窯詰め完了
窯はレンガ作りの桶窯。

南九州の土人形産地

県内には、帖佐人形以外に垂水人形・東郷人形・宮之城人形・向花(旧国分市)人形などの産地がありました。今では、垂水人形(垂水市)も復活しています。

鹿児島県内の土人形

県伝統的工芸品

帖佐人形

始良郡始良町西餅田
高樋自治会内



武内宿禰

兜ささげ

東郷人形

鹿児島県薩摩川内市東郷舟倉

創業時期は不明であるが、明治20年頃榊治衛門・阿機夫婦が始めたという説が有力である。

最盛期は明治から大正の頃で、榊・田代・戸木田・淵ノ上の四家が製作に携わっていた。販路は主に薩摩郡川内・串木野方面であった。昭和10年榊鶴江氏を最後に途絶えている。



鯛抱きエビス

八重垣姫

宮之城人形

鹿児島県さつま町宮之城

東郷人形製作者の榊袈裟次郎氏の甥で、弟子でもあった松永伸次郎氏が宮之城で製作した土人形である。昭和3年から13年まで続いた。東郷人形に酷似しており、東郷人形との判別は困難である。色落ち防止にニスを塗る例が多い。



布袋

垂水人形

鹿児島県垂水市本城

夢創庵 TEL0994-32-4088

大正時代末頃までは、垂水小学校裏手(後馬場)で渡辺氏が製作していたが、その後途絶えていた。現在、中島三郎氏が復活し、三月の節句人形・福助・力士・犬・猫・鯛抱き恵比寿などを製作している。

古い人形はやや薄手で、底をふさぐものが多い。彩色は淡く、色落ちしやすい。



九州の土人形産地



苗代川
日置市東市来町美山

薩摩焼の窯元がある苗代川では、手びねりや型物の人形が作られた。

佐土原人形

宮崎市佐土原町



相模と熊谷次郎

安倍宗任と源義家

伏見人形との類似性や現在残っている人形から、江戸時代の中期末に始まったという説が有力である。

江戸時代、佐土原座が演じる古典歌舞伎の影響を強く受け、奥州安達ヶ原・一の谷ふたば軍記・阿漕ヶ浦などの名場面を如実に捉え、躍動する人形を作り上げている。また、差し手・挿し首の技法は佐土原人形の特長といえる。現在2軒の窯元が伝統を守っている。



挿し首

熊本県内の土人形

天草人形

熊本県本渡市

唐津の浪士広田和平が享保年間(1716~36)に熊本県本渡市で作り始めたといわれている。

作品は節句ものが主でヒナ・山姥・三番叟・福助・大黒などが多い。



マサカリ担いだ金時 山姥と金時

長崎県内の土人形

古賀人形

長崎市中里町

小川家では、異国情緒の「オランダさん」や「阿茶さん」など江戸時代からの伝統を守っている。



軍鶏を抱いた阿茶さんと子守女